

ボランティア活動が学生に与える影響

— 自尊感情と社会人基礎力 —

The influence of volunteer activities on students

— Self-Esteem and Fundamental Competencies for Working Persons —

中村学園大学 流通科学部

音 成 陽 子

I. はじめに

中央教育審議会（2002）は「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について（答申）」において奉仕活動を「自分の能力や経験などを生かし、個人や団体が支えあう、新たな“公共”に寄与する活動」と定義している。具体的には「自分の時間を提供し、対価を目的とせず、自分を含め地域や社会のために役立つ活動」としている。このような奉仕活動・体験活動を行う意義を次のようにあげている。

- ①他人に共感すること、自分が大切な存在であること、社会の一員であることを実感できる
- ②思いやりの心や規範意識をはぐくむことができる
- ③広く物事への関心を高め、問題を発見したり、困難に挑戦し解決したり、人との信頼関係を築いて共に物事を進めていく喜びや充実感を体得できる
- ④指導力やコミュニケーション能力をはぐくむとともに、学ぶ意欲や思考力、判断力などを総合的に高め、生きて働く学力を向上させる

学生に対しては、特に「（以下引用）何を目指して学ぶかが明確になって学ぶ意欲が高まり、就職を含め将来の人生設計に役立てることができる」としている。

さらに、中央教育審議会（2012）は「新たな

未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」において、「単なる知識再生型に偏った学力、自立した主体的思考力を伴わない協調性、他者の痛みを感知しない人間性は通用性に乏しい」として、学士力の重要性を述べた。それは、大学教育の質的転換として受動的学修から能動的学修（アクティブ・ラーニング）の推奨であり、授業における教育上の工夫だけでなく、教室外学修プログラムの提供の必要性があげられた。大学は、ボランティア講座やサービス・ラーニング科目、インターンシップを教育活動として取り組むことになった。また、学内外のボランティア活動に対して大学の奨励・支援が推奨された。

日本私立大学連盟「私立大学学生白書2011」によれば、学生のボランティア活動の参加率は26.5%であり、学年があがるにつれて高くなる傾向がみられ、3年生31.0%、4年生35.1%であった。つまり、大学生の1/4は何らかのボランティア活動を経験しているようである。本学におけるボランティア活動に対する学生の意識は、平成27年度学生生活実態調査（2015）において、「大学生活での重視点ーボランティア等の奉仕活動6.3%」であり高いとはいえないだろう。流通科学部だけでみると、2.3%（17/751名）と低い割合を示していた。ただし、大学生活での重視点と認識せずに活動に参加し

ている学生がいることは想像に難くない。よって、実際はより多くの学生がボランティア活動に参加しているといえるだろう。なぜならば、中央審議会（2012）はボランティア活動の例として、学内の環境整備、学内のコンピュータやネットワークに関する技術的支援、図書館・学内のスポーツ施設の地域住民への開放などでの業務支援、留学生や障害を持った学生に対する支援などをあげている。そうであれば、本学のスチューデントジョブ（SJ）やスチューデントアシスタント（SA）などもボランティア活動といえるのかもしれない。よって、ボランティア活動に参加している本学学生は、調査数よりも多いといえるだろう。

ボランティア活動の経験が学生に与える影響について河井（2012）は、活動に参加し、かつ参加を継続することが学習に結び付くこと、知識・技能の習得さらには領有につながることを明らかにしている。溝上（2009）、山田・森（2010）、河井・木村（2013）は授業での学びと授業外での学びといった異なる場面と移行・往還することで学習を統合させるラーニング・ブリッジが学生の充実感や将来設計、知識・技能の習得に重要であると述べている。

このようにボランティア活動が学生の学修や大学生活に与える影響についての先行研究は多い。一方、ボランティア活動が学生の社会性や自尊感情に与える影響についての研究は浅川ら（1998）、上田（2008）、鈴木ら（2013）などにみられるものの多いとはいえない。

中村学園大学流通科学部音成ゼミでは、「スポーツやボランティア活動を通して、地域社会に貢献する」をテーマに様々な人々と交流をするなかで、社会貢献とは何かを学び、自分には何ができるのかを学修している。日本学生機構（2009）の調査において学生がボランティアに力を入れている活動分野は「お年寄りや障害のある人などを助ける」（50.7%）、「いきいきとした地域を作る」（31.3%）であり、ゼミ活動の内容と合致している。

2年次後学期より卒業までの約2年半がその活動期間となる。9月開始とした活動内容を表1に示す。ゼミ活動は3年生を活動主体とし、4年生はオブザーバー的役割、2年生にはサポーター的役割を担っている。サポーター的役割であった2年生は、下級生を迎える前の6月に主体として上級生のいない状況で活動する。

そこで本研究は、1年間の活動サイクルを終えた学生が、ボランティア活動を行ったことから受けた影響を自尊感情と社会人基礎力から明らかにすることを目的とした。そのために、活動に参加していない1年次の学生を比較対象とした。さらに、得られた結果から、今後のボランティア活動のあり方を検討するものである。

注1）自尊感情とは Rosenberg（1965）によると、自己に対する肯定的または否定的な態度とされる。清水（1982）によれば、自己の行動が受容・承認される体験を通して、得る現実的な自己評価、自己確信

表1 活動内容

	名 称	主 催
9月	夜須高原音楽祭	夜須高原音楽祭実行委員会
10月	ライジング福岡公式戦	福岡プロバスケットボールクラブ株式会社
11月	ど〜んとかがし祭り	筑前町
3月	若獅子旗なぎなた大会	九州なぎなた連盟 ほか
6月	福岡障がい者OPバドミントン大会	福岡市 ほか

注) ライジング福岡は2016年7月にライジングゼファーフクオカに名称変更。

と述べている。

注2) 社会人基礎力とは、経済産業省が2006年より提唱している職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力のことである。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成されている。

II. 研究の方法

1. 調査の時期と対象

3年生は2016年6月23日の流通科学研究演習II、1年生は2016年6月28日の生涯スポーツ論のいずれも授業開始時に調査を行った。

対象は2016年度に3年生であり音成ゼミナールに所属する学生(以下14B学生)12名(男子8名、女子4名)とした。2年生であった2015年9月よりゼミナールに所属し、3・4年生の活動をサポートする状況で参加してきた。調査は上級生のいない初めての活動後である。比較として2016年度入学生(以下16B学生)でデータに欠損のなかった264名(男子101名、女子163名)を対象とした。14B学生の調査にあわせて行った。

14B学生のデータ数が少ないこと、ゼミナールの所属は活動内容を理解・承知して活動に参加していることというバイアスが考えられる。

2. 方法

調査の方法は、質問紙法による。データは全て数値化され、個人が特定されないことは了承済みである。調査内容は学年、性別、自尊感情(self-esteem: 自己肯定感ともいう)と社会人基礎力である。

自尊感情については、Rosenberg (1965) の自尊感情尺度から山本ら (1982) の日本語訳をもとに調査用紙を作成した。質問項目は10項目(表2)である。評価はRosenberg (1965) と同様に「はい(4点)」「どちらかといえば、はい(3点)」「どちらかといえば、いいえ(2点)」「いいえ(1点)」の4件法を用いた。なお、Q3、Q5、Q8、Q9、Q10は反転項目であり、合計得点を算出した。合計得点の範囲は10-40点である。桜井(2000)や内田ら(2010)、伊尻(2015)は性別間で有意差はなかったという結果を得ている。加えて、14B学生のデータが少ないことから性別による検討は行わなかった。

社会人基礎力については、能力の具体例が学生(特に、1年生)に理解しやすいことを重視し、大学生協の社会人基礎力の説明をもとに作成した。質問項目は12項目(表3)でそれぞれ社会人基礎力の12の要素に対応している。評価は経済産業省の社会人基礎力レベル評価基準表を用いた。普段の授業やサークル活動、アルバイトなどの場面を思い浮かべて回答してもらい、「発揮できなかった(どうしてもできなかった)1点」「通常状況では発揮できた(何とかできた)2点」「通常状況で効果的に発揮できた(見事にできた)、困難な状況でも発揮できた(とても難しかったが、何とかできた)3点」とした。学年×性別の交互作用について、井芹ら(2016)は交互作用に有意でなかったとしていること、14B学生のデータが少ないことから性別による検討は行わなかった。

統計処理にはIBM SPSS Statistics 22を使用し、有意水準を5%とした。自尊感情は自尊感情尺度(合計点)についてt検定を行った。社会人基礎力については学年、社会人基礎力、3つの能力、各項目についてt検定を行った。

表2 自尊感情

Q 1	少なくとも人並みには、価値のある人間である。
Q 2	いろいろな良い素質を持っている。
Q 3 (※)	敗北者だと思ふことがよくある。
Q 4	物事を人並みには、うまくやれる。
Q 5 (※)	自分には、自慢できるところがあまりない。
Q 6	自分に対して肯定的である
Q 7	だいたいにおいて、自分に満足している。
Q 8 (※)	もっと自分自身を尊敬できるようになりたい。
Q 9 (※)	自分は全くだめな人間だと思ふことがある。
Q10 (※)	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思ふ。

※反転項目

表3 社会人基礎力

Q 1	【主体性】 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
Q 2	【働きかける力】 「やろうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かす。
Q 3	【実行力】 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
Q 4	【課題発見力】 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
Q 5	【計画力】 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、準備する。
Q 6	【創造力】 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
Q 7	【発信力】 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらえるように的確に伝える。
Q 8	【傾聴力】 相手の話しやすい環境を作り、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
Q 9	【柔軟性】 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
Q10	【状況把握力】 チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
Q11	【規律性】 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
Q12	【ストレスコントロール力】 ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

Ⅲ. 結果と考察

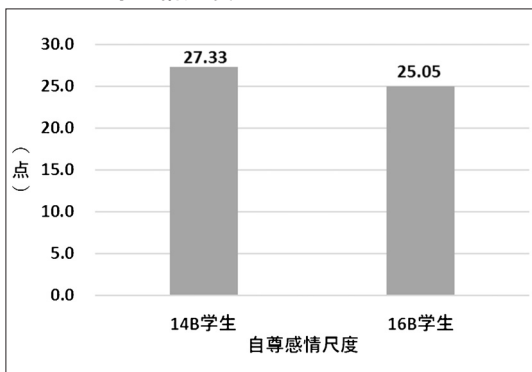
1. 自尊感情

自尊感情尺度（図1）は14B学生 27.33 ± 5.23 （最大値33、最小値15）、16B学生 25.05 ± 5.00 （最大値40、最小値11）であった。大学生を対象とした自尊感情尺度は、桜井（2000）は 27.93 ± 5.51 、内田ら（2010）は 25.10 ± 4.57 、伊尻（2015）は 28.92 ± 7.82 であったことから、本研究の結果は先行研究の範囲内であった。本研究の対象者の結果は、16B学生に比べ14B学生の方が高い値となった。そこで、14B学生と16B学生についてt検定を行ったところ、 $t=1.545$ 、 $p=.123 > 0.5$ で有意な差はみられなかった。

清水（1982）の結果によれば、1年生 26.18 ± 5.11 、3年生 26.89 ± 4.69 で差はみられなかった。そして、いずれの学年においても、自尊感情の高い者は所属している学科の満足度、適応度、学習意欲、大学生生活の充足度が高かった、学年進行にともなって向上したという結果を得ている。それには、学生生活の年数・経験という外的条件だけでなく、個人が積極的に自分の置かれた状況に関わることが重要であり、自尊感情の果たす役割が大きいという。豊田（2006）は随伴経験（自分の行動に成果が伴う）の多いことが自尊感情を有意に高めると述べている。

14B学生はゼミナールに参加して3月までは、3・4年生の様々なボランティア活動に追随し、サポート的な立場で活動をしてきた。調査時は

図1 自尊感情尺度



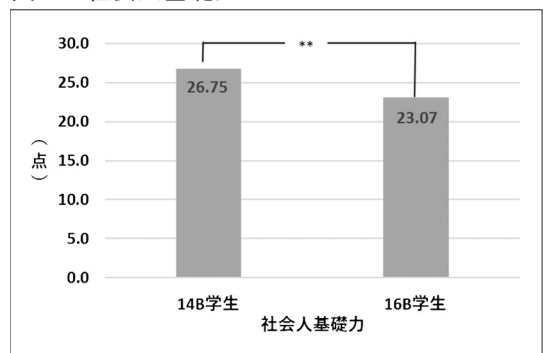
3年生となり、ボランティア活動を主体的に行ったことが随伴経験となったため、高い値を示したと考えられる。

2. 社会人基礎力

社会人基礎力について、図2に示した。14B学生 26.75 ± 3.28 （最大値31、最小値20）、16学生 23.07 ± 4.10 （最大値35、最小値13）であり、14B学生が高い値を示した。そこで、14B学生と16B学生についてt検定を行ったところ、 $t=3.065$ 、 $p=.002 < .01$ で有意な差がみられた。

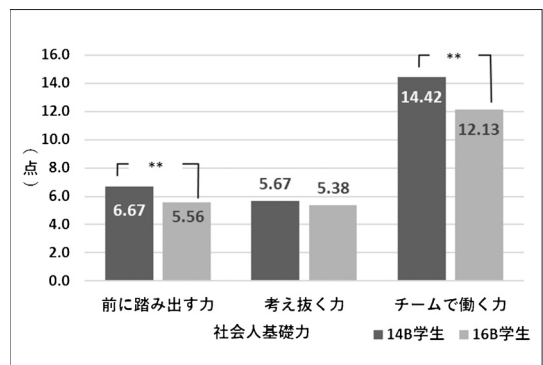
社会人基礎力の3つの能力について図3に示した。「前に踏み出す力」について14B学生 6.67 ± 1.44 （最大値9、最小値4）、16学生 5.56 ± 1.37 （最大値9、最小値3）であり、14B学

図2 社会人基礎力



** : $p=.0023 < .01$

図3 社会人基礎力（3つの能力）



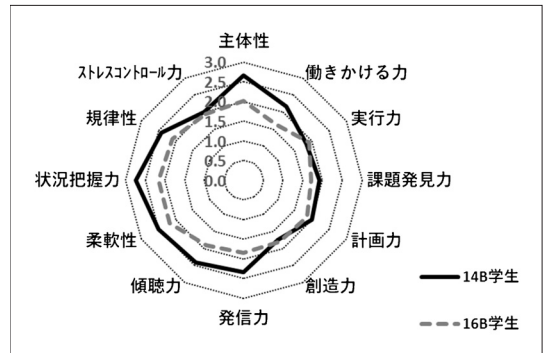
前に踏み出す力** : $p=.007 < .01$

チームで働く力** : $p=.002 < .01$

生が高い値を示した。「考え抜く力」について14B学生 5.67 ± 1.23 （最大値8、最小値4）、16学生 5.38 ± 1.32 （最大値9、最小値3）であり、14B学生がやや高い値を示した。「チームで働く力」について14B学生 14.42 ± 2.61 （最大値17、最小値8）、16学生 12.13 ± 2.46 （最大値18、最小値6）であり、14B学生が高い値を示した。そこで、14B学生と16B学生についてt検定を行ったところ、「前に踏み出す力 ($t=2.726, p=.007 < .01$)」と「チームで働く力 ($t=3.135, p=.002 < .01$)」に有意な差がみられた。「考え抜く力」は $t=.749, p=.454 > .05$ で有意な差はみられなかった。

社会人基礎力の12要素について表4および図4に示した。16B学生に比べ14B学生が高い値を示した要素は、主体性、働きかける力、課題発見力、計画力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力の10要素であった。14B学生と16B学生について

図4 社会人基礎力（項目別）



t検定を行ったところ、主体性 ($t=4.017, p=.00008 < .0001$)、働きかける力 ($t=2.745, p=.006 < .01$)、発信力 ($t=2.379, p=.018 < .05$)、傾聴力 ($t=2.612, p=.009 < .01$)、状況把握力 ($t=3.428, p=.0007 < .001$) の5要素に有意な差がみられた。

中央教育審議会答申（2002）は自発性について学校教育においては、「自発性は活動の要件

表4 社会人基礎力（12の要素）

能力	12要素	14B学生	16B学生	t値	p値	
前に踏み出す力	主体性	2.67 ± 0.49	2.00 ± 0.56	4.017	.00008	****
	働きかける力	2.17 ± 0.83	1.63 ± 0.65	2.745	.006	**
	実行力	1.83 ± 0.58	1.92 ± 0.66	-0.469	.639	ns
考え抜く力	課題発見力	1.92 ± 0.67	1.72 ± 0.61	1.111	.267	ns
	計画力	2.00 ± 0.43	1.86 ± 0.62	0.779	.437	ns
	創造力	1.75 ± 0.62	1.80 ± 0.65	-0.258	.797	ns
チームで働く力	発信力	2.33 ± 0.78	1.85 ± 0.69	2.379	.018	*
	傾聴力	2.42 ± 0.51	1.91 ± 0.66	2.612	.009	**
	柔軟性	2.50 ± 0.52	2.18 ± 0.60	1.800	.073	ns
	状況把握力	2.75 ± 0.62	2.16 ± 0.58	3.428	.0007	***
	規律性	2.42 ± 0.90	2.09 ± 0.58	1.857	.064	ns
	ストレスコントロール力	2.00 ± 0.60	1.94 ± 0.66	0.314	.754	ns

* : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$ **** : $p < .0001$

でなく活動の成果といえる」という。つまり、様々な活動後に学生の自発性が期待されると考えられる。したがって、14B 学生の主体性が16B 学生よりも高いことは、これまでのボランティア活動の成果といえるかもしれない。

14B 学生よりも16B 学生が高い値を示した要素は実行力と創造力である。実行力とは目的を設定し確実に行動する力であり、創造力とは新しい価値を生み出す力のことである。有意な差はみられなかったもののこの2要素が14B 学生のボランティア活動、あるいはゼミナール活動における課題であることが示唆された。つまり、14B 学生には主体性や働きかける力はあるものの確実に行動する実行力がともなっていない、課題発見力や計画力はあるものの新しい何かを生み出す創造力が伴っていないのかもしれない。

辻ら (2015) は社会人基礎力と自尊感情との関連について、アクティブラーニングはメタ的に自分自身の能力や適性を振り返る機会になっていると述べている。その際、自尊感情が高いほど能力不足を意識し自己評価が低下する結果を得ている。

したがって、14B 学生は、ボランティア活動を企画して実践することや新しいものを創り出すような活動を行い、成果を得る随伴経験を積み重ねることで有能感を高めることが必要であるといえる。

IV. まとめ

ボランティア活動を行ったことから受けた影響を自尊感情と社会人基礎力から明らかにすることを目的に、16B 学生 (1 年生) と14B 学生 (3 年生) を対象として、比較を行い、以下のような結果が得られた。

- ・自尊感情について16B 学生に比べ14B 学生は高い値を示す傾向がみられた。
- ・社会人基礎力について、総合的に16学生に比べ14B 学生は高い値を示し、有意な差 ($p < .01$) がみられた。

- ・社会人基礎力の3つの能力については、全てにおいて16学生に比べ14B 学生は高い値を示したものの、「前に踏み出す力」と「チームで働く力」に有意な差 (各 $p < .01$) がみられた。
- ・社会人基礎力の12要素については、16B 学生に比べ14B 学生が高い値を示した要素は、主体性、働きかける力、課題発見力、計画力、発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力の10要素であった。そのうち、主体性 ($p < .0001$)、働きかける力 ($p < .01$)、発信力 ($p < .05$)、傾聴力 ($p < .01$)、状況把握力 ($p < .001$) の5要素に有意な差がみられた。

これらの結果について、14B 学生のデータ数が少ないこと、ゼミナールの所属は活動内容を理解・承知して活動に参加していることというバイアスが考えられる。よって、今後、さらなる検討が必要といえる。

溝上 (2009) は学生をタイプ別に検討し、成長する学生は「授業に出席しつつ授業外学習や読書もおこなう、さらに遊びや対人的な活動にも多くの時間を費やす、いいかえれば“よく遊び、よく学ぶ”活動性の高い学生」ということ結果を得ている。山田ら (2010) は、正課・正課外ともにバランスよくコミットし、それがポジティブなものとして受け止めている者は汎用技能の獲得が高いという。さらに、正課と正課外は相補完的に汎用技能を獲得していた。河井 (2012) が、ボランティア活動の継続とより多くの活動に参加することで学生の知識・技能の習得さらには領有につながることを述べている。これらことから学生には在学中に学内外で多くの経験を重ねることが期待される。

【謝辞】

学生のゼミナール活動の場をご提供いただいた筑前町、福岡プロバスケットボールクラブ株式会社、福岡県なぎなた連盟、福岡市立障がい

者スポーツセンターの皆さまに感謝申し上げます。また、調査に協力していただいた学生のみなさま、その他関係各位にも御礼申し上げます。

【文献】

- 浅川潔司・仲上馨子ほか (1998), 大学生の共感性とボランティア活動の関係, 学校教育学研究10, 89-93.
- 大学生協東京事業連合, 「with navi 大学生の為の仕事研究～社会人基礎力～」,
<http://www.withnavi.org/>
- 堀洋道・山本真理子ほか編 (1994), 「心理尺度ファイル: 人間と社会を測る」, 垣内出版.
- 堀洋道 (監)・山本真理子編 (2001), 「心理測定尺度集〈1〉—人間の内面を探る“自己・個人内過程”」, サイエンス社.
- 伊尻正一 (2015), 大学生が過去に出会った教師の好悪に関する研究: 特性形容詞尺度と自尊感情尺度の結果から, 東日本国際大学福祉環境学部研究紀要11 (1), 87-96.
- 井芹まい・河村茂雄 (2016), 大学生の社会人基礎力の獲得タイプと自我同一性との関連, 早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊 (23-2), 61-71.
- 河井亨 (2012), ボランティア活動への参加によって学生の学習がどう異なるのか, ボランティア学研究 (12), 91-102.
- 河井亨・木村充 (2013), サービス・ラーニングにおけるリフレクションとラーニング・ブリッジングの役割: 立命館大学「地域活性化ボランティア」調査を通じて, 日本教育工学会論文誌 36 (4), 419-428.
- 経済産業省, 「社会人基礎力」,
<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>
- 経済産業省 (2008), 「今日から始める 社会人基礎力の育成と評価」, 角川学芸出版.
- 溝上慎一 (2009), 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討: 正課・正課外のバランスのとれた活動が高い成長を示す, 京都大学高等教育研究15, 107-118.
- 文部科学省中央教育審議会 (2002), 「青少年の奉仕活動・体験活動の推進方策等について」, 答申
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1287510.htm
- 文部科学省中央教育審議会 (2012), 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)」,
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
- 中村学園大学生生活支援課 (2015), 「平成27年度学生生活実態調査」
- 日本学生支援機構 (2009), 平成20年度大学等におけるボランティア活動の推進と環境に関する調査報告書,
<http://www.jasso.go.jp/about/statistics/volunteer/2008.html>
- 日本私立大学連盟 (2011), 「私立大学学生白書2011」, 11gakuseihakusho.pdf
- Rosenberg M (1965), Society and the adolescent self-image, Princeton University Press.
- 桜井茂男 (2000), ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討, 筑波大学発達臨床心理学研究12, 65-71.
- 清水信介 (1982), 自尊感情 (self-esteem) と学生生活への適応に関する一考察, 室蘭工業大学研究報告文科編10 (4), 473-492.
- 信夫千佳子 (2014), 学生の自律性と社会性の育成—ゼミナールとクラブ・サークルを事例として—, 桃山学院大学経済経営論集55 (4), 335-376.
- 鈴木康文・佐藤和典ほか (2013), 大学教育の中における課外活動の教育的意義: つくば国際トレーナー活動研究会における取組み, 医療保健学研究: つくば国際大学紀要 (4), 51-60.
- 豊田弘司 (2006), 大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果, 教育実践総合センター研究紀要15, 7-10.
- 辻義人・杉山成 (2015), アクティブラーニングの学習効果に関する検証 (2) 学習者の自尊感情が社会人基礎力の獲得に及ぼす影響に注目して (高橋純名誉教授記念号), 小樽商科大学人文研究130, 109-138.
- 内田知宏・上埜高志 (2010), Rosenberg 自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討—Mimura & Griffiths 訳の日本語版を用いて, 東北大学大学院教育学研究科研究年報58 (2), 257-266.
- 上田雪子 (2008), 学生の社会的スキルと自尊感情およびボランティア活動との関連, 純真紀要 (49), 131-143.
- 山田剛史・森朋子 (2010), 学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における正課・正課外の役割, 教育工学会誌34 (1), 13-21.
- 山本真理子・松井豊ほか (1982), 認知された自己の諸側面, 教育心理学研究30 (1), 64-68.